

アカタブ及びシロタブに就て

鹿児島大学 高橋 四十夫

石 泉 研 二

徳 佳 昌 亮

タブ (*Machilus Thunbergii* S. et Z.) にはアカタブ及びシロタブの二種があるとされているが、分類学的には区別はない様である。然し材としてのアカタブは紅色堅硬で、シロタブは色薄く腐朽し易く軽軟であると云われる。一般にアカタブが好んで使用されるが、ベニヤ等にした場合、用途によつてはシロタブの方が好まれる場合もある。然るにシロタブなる名称で呼ばれるものは地方により異なるものの称で、南九州ではアオガシの事をシロタブと呼んでいる。由つて通常シロタブと呼ばれる材はタブであるか否か、或は又アオガシが混じているのではないかということを確認する為、資料を鹿児島県林務製材工場及び南九州合板株式会社より提供を受け、解剖学的に之を調査して見た。尚アオガシは本校校庭のものを使用した。本より同属のものを解剖学的に区別するのは相当困難であり、且資料も充分でないので満足する様な結果は得られなかったが、其の結果を略記すれば次の如くである。

導管の散布状況は、アカタブ、シロタブ、アオガシ共に平等に散布し大体同様であつて、接合方向も半径方向に2~4個であるが、アカタブには稀に例外が認められる。シロタブに於ては接合しているものが比較的少くアオガシは之が多い。1mm²内の導管数はシロタブが16~20で両者の中間にありアカタブが最も少い。単一導管はシロタブ最大でアオガシ之に次ぎ、形状は何れも半径方向に長い。其の膜厚は三者共5μ程度で、シロタブが幾分厚い。導管壁の重紋孔は何れも切線方向に長い楕円形であるが、シロタブは稍、円に近い。其の排列、穿孔等も同様であるが、木繊維の間、厚さ等はタブが最大でシロタブが之に次いでいる。髄線の並列細胞数は1~4であるが、シロタブに於ては単列のものは特に稀である。複列髄線の高さ、巾等はシロタブはアオガシに近い。要するに個体差を考えると、此処に表われた結果のみを以ては直ちにシロタブをアカタブと区別する程の根拠もない様に思われるが、之を明確にする為には更に多くの資料と精細な調査を要する。但しシロタブが従来云われる如く強度の点に於てアカタブに劣る事は木繊維の膜の薄い事、導管の多い事等より推察し得る。